
きらきらひかる

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きらきらひかる

【Nコード】

N4886J

【作者名】

雪芳

【あらすじ】

わたしは万引きをする、捕まる。

指先で、コートのポケットの奥、内側の布地の感覚を味わっていた。

爪の間と、手のひらに自分の汗をやりわりと感じながら、由梨はやがて目線をソレに落とした。

一呼吸おく。

背後に感じる、クラスメートの郁子の気配に後押しされるように、由梨は覚悟を決めた。

チャンスを伺い、そっと右手を伸ばす。ポケットから手を出した瞬間、体の中の全てが熱くなった気がした。

大丈夫だ。

そのまま、先ほどから獲物のように狙いを定めていたソレをふたつ、握りこむ。

硬質の感触。ラピスラズリは、冷たかった。

ひとつだけ、戻す。そしてそのまま、ラスピラズリを右手に握りながら、棚の上に飾られた幾つかの美しい石に触れる。

そして、財布をポケットから取り出す動作と同時に、握りこんでいたラピスラズリをポケットの中へぼとんと落下させた。

それが、数十分前の、出来事。

「かばん調べるから、中のもの出してくれるかな？」

机のちょうど向かいに座る若い警官に促されるままに、由梨は学校指定の紺色のかばんの中身を次々と無造作に、アルミ製の机の上に放り投げ始めた。

ガチャガチャと、それらはガラクタらしい音をたてて机の上に横たわる。教科書とノート二冊、携帯電話、手帳、空になった弁当、チエブラーシカの縫いぐるみ、参考書、その他もろもろ。

「財布は？」

由梨はだんまりとしながらポケットから財布を取り出し、警官に渡した。

警官は渡された二つ折りの紫の皮製の財布を開くと、その中に仕舞い込まれた幾枚のカードと、大量の硬貨、そして一万円札を取り出した。

「お金持つてるじゃない、君は？」

郁子も、警官に言われたとおり、かばんの中身と財布を並べる。

郁子は、まさに茫然自失といった表情をしていた。

今にも、泣きそうだ。いかにも何が起こっているのか分からないといった態度で。

「あのう、なにかの間違いって事はないんですか？だって由梨が知らない内にポケットに入ってたとか…」

「それは絶対ないから」

警官は真面目な顔をしていたが、声は同情色をしている。郁子は万引きをしていない、そういう推理が彼の脳の中で展開しているのだ。

郁子は、本当に演技が上手いなあ…。

由梨はぼんやりとそんな事を思った。全くもって無関心に思った。あとで金でも貰って慰めてもらおう、と頭の片隅で思った程度だった。

二人がなんとなく万引き行為をする時、郁子はいつも見張り役だ。

そしてバレたらいつも、知らなかったフリをする。

そういう役割なのだ。“信じられない”…そういう事を態度で示す、役割。

こうすれば、初犯だと思われて、許してくれる。今、両親の仲が悪くてムシャクシャしてて、とか言ったりして。「もう二度とやらないんだよ」なんてね。

今日は運悪く、警察に引き渡されてしまったが…。

郁子の演技は完璧だ。とても嘘をついているとは思えない。必死になると案外、人間って凄いものなんだな、と由梨は思う。

誰が見ても、犯人は由梨だけ。

警官は一通り彼女らの持ち物を調べると、紙に何かを書き込んでゆく。

「名前は？」

「桜井由梨…。」

由梨の返事を、警官はじっと見つめて聞いた。

由梨は一瞬、まるで自分がプラスチックの人形になってしまって、透明な由梨の形骸を丸々見透かされたような気がした。

少しの沈黙をおいて、警官は質問を再開し始めた。由梨は警官の質問に、ハッキリ正直に答えていく。

質問の合間に、郁子は別室へと、移動させられる。由梨が、ただ一人。

「それで、お金もあるのに何で万引きなんかしたの？」

警官の声。まるで何かを捨てるときの瞳の色。その瞳の色に、由梨は再び自分の肉の感覚を失う。

プラスチックの人形は、息を吹くように言葉を舌に滑らせた。

「別に…よく分からない。」

その言葉が、今の自分の全てだと由梨は思う。違和感はなに一つ無かった。

警察署を出ると、牡丹雪がちらちらと降っていた。

由梨は、迎えに来た父親の丸まった背中を見ながら、なんて小さい人なんだろうと思った。太陽が沈みきった冬の匂いに包まれて、本当に小さい。

ビショビショの牡丹雪に塗れた汚いアスファルトに、今にも足を捕らわれそうな自分にさえ気づかず、そう由梨は思った。

そして、自分の睫の向こうと、父親の愚鈍な脂肪の向こうに、確かに街が光に踊っているのを由梨は強く感じた。夜に映える、宝石箱のような光線の束。

ライトに照らされて、夜光虫のように街が濡れて光る。水気の多い雪による青っぽい白化粧、しかし。

いつもと少し色合いが違っただけで、けして美しいと、素敵だと、由梨は思う事が出来ない。そんな街の様子を、父親の車のドアに手を置きながらほんの少し見やる。

キラキラ光るその街に、罪で汚れている筈の自分が、異物には感じられない事に、由梨は気づいている。

「なんて、キレイなんだろう。」

由梨はにこりと笑って、ぽつんと呟いた。

見上げると、ビルに切り取られた灰色の狭い空。

ドロドロの雲から、それでも真白の雪は降り注ぎ、由梨の全身を急激に冷やしてゆく。雪を落とす空の所為で、自分も降下してゆような感覚がある。

瞬間、右目が一気に温度を下げた。牡丹雪の一欠けらが、由梨の右目に落ちて蕩けたのだった。その冷たさに、空から街へと、ゆっくりと首を戻す。

そして由梨はもうひとつ気が付いた。

街は美しかった。そればかりか、幻想的でした。

ただし、右目に溢れる水による乱反射の所為で。

由梨はひとすじの涙を、右頬に感じていた。粘膜には、揺らめきながらも確かに、神の子の匂いを放つ世界が映しこまれていた。

またたき、まばゆく。歪み。

由梨にとっては、やはりどうでもいい気付きではあったけどれど。本当に、どうでもいい。

そして由梨は呟くのだ。

「 。 」

（後書き）

中学くらいに。

万引きはダメです。お店が困るから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4886j/>

きらきらひかる

2011年1月28日06時39分発行